

On the Definition of Political Economy : In the Case of the early J. S. Mill

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/18347

初期J. S. Millにおける経済学の定義と方法

山 辺 知 紀

J. S. ミルの経済学の定義と方法を問題にしようとするとき、われわれが先ず第一に思い浮かべるかれの著作が、1843年に出された『論理学体系』と1848年に出された『経済学原理』であることは、おそらく異論のないところであろう。『論理学体系』は全6巻におよぶ大部なもので、特にその第6部「道徳科学の論理」(Logic of the Moral Sciences)では、社会科学の方法についての彼の独自の主張が展開されている。『経済学原理』は、この『論理学体系』完成後、比較的短期間のうちに書き上げられているが¹⁾、こうしたところから考えても、ミルの経済学の定義と方法とについて見ていこうとするなら、これら二つの著書を対象にして見て行くのが自然な研究方法かと思う。

しかし、わたしが今ここでこれから行なおうとするのは、いわばこの二つの著書を理解するための入口を、わたしなりに整理しようとすることである。1826年の精神的危機以来、ミルがかれ自身の新しい立場を作りあげるために種々苦悩し、それまでの自己のベンサム主義を反省的に捉えなおし、ベンサム主義とは正反対のカーライルやコールリッジの思想を摂取せざるをえなくなったのはよく知られている。そしてそれらを踏まえたかれの新しい思想は、1830年代の後半から40年代にかけて次々と発表された「文明論」(1836)、「ベンサム論」(1838)、「コールリッジ論」(1840)、「トックヴィルのアメリカの民主主義」(1840)のなかで表明されていった。これらの一連の論文で扱われている主題は種々異なっているが、もし短絡的な整理が許されるならば、そこに一貫して流れているかれの関心は、これについては「ベンサム論」や「コールリッジ論」を扱ったところですでに述べたことではあるが²⁾、

社会と国家とを区別し、その上でかれが新たに取り入れた歴史研究の成果に基づいて再度それらに関連づける方向を模索するものだったということが出来るかも知れない。

こうしたミル自身の思想的な営為のなかには、それほど目立ったものではないにしても、それまでの経済学に対する再検討の作業も含まれていたことは見落とされてはならない。のちに『経済学の若干の未解決の問題について』⁽⁹⁾ (1844) のなかに収録されることになる「経済学の定義について、及びこれに固有な研究方法について」(以後「経済学の定義と方法」と略記する)という論文の初稿は、1830年頃に書かれ、33年頃に修正稿が作られ、36年には『ウェストミンスター評論』に掲載されている。この36年の版と44年のそれとのあいだには、殆ど大きな書き換えがないと言われている。そしてここで追求されている課題は、『論理学体系』の中で更に敷衍され最終的には『経済学原理』へと結実していく。そしてこの底流には、当時のヴィクトリア期において、演繹科学であることを理由にトータルな社会認識の科学として自己を誇示し、しかも社会的には「憂鬱なる科学」として非難を浴びせられていた経済学にたいし、この科学の有効性の限界を明らかにし、それによって経済学と他の社会科学との有意味な対話の可能性を模索しようとするミルの強い意志が働いていたとも考えられる⁽⁴⁾。

この小論で試みようとするのは、主要にはこの「経済学の定義と方法」を対象にして、のちに『論理学体系』や『経済学原理』へと結実していくかれの経済学の定義と方法に焦点をしばり、その成立過程を見ていこうとするものである。そのため、叙述の順序としては、最初、ミルにとって経済学の定義と方法の研究が問題にならねばならなかった理由について、これを当時の情況へのかれ自身の関わり方の中で、考えていく作業があり、ついで「経済学の定義と方法」に現われたその定義と方法について、それぞれ節を分けて考えていこうと思う。

(1) 経済学への疑問とその再建への道

ミルは、かれの言うところの精神的成長の第3期(1840—1870)を、『論

理学体系』(1843)と『経済学原理』(1848)という二大著作を世に出すことから始めたと言うことができるかもしれない。『論理学体系』についてはしばらくおくとして、『経済学原理』にたいしてミル自身が表明しているかれの意図あるいはこれを書くことになる経緯について、『自伝』のなかから引用してみよう。ミルは、当時自分が、ベンサム主義に対する反動を反省し、自分の軌道を修正していたと述べ、それに続けて以下のように述べている。

「われわれ二人(テイラー夫人とミル……引用者)のその頃の意見は、もっとも極端なベンサム主義を信奉していた頃のわたしの意見と比べても、比べものにならないくらい異端的なものであった。前の時期のわたしは、旧派の経済学者たちとちっとも変わりがなくらいに、社会機構を根本的に改革することの可能性には見通しを持っていなかった。現在理解されている意味での私有財産、それに財産の相続ということが、法律上変更の余地のない制度であるとかれらも思ったしわたしも思った。したがってそういう制度から不平等を緩和する方法としては、長子相続権や限嗣相続制を廃止するという以上には考えられなかった。あるものは生まれながらにして富み、圧倒的大多数は生まれながらにして貧しいという事実内に在る不法さ——それに対する完全な対策があると考えずにせよないと考えるとせよ、これが不法であることは間違いがない——を取り除くのに、もっと根本までさかのぼることも可能なのだという考えは、当時のわたしには単なる空想としか思われず、わたしはただ、教育の普及から自発的な人口の抑制が生みだされて、それによって貧しいものの取り分がもう少しましなものになるということを期待するだけだった。簡単に言えばわたしは、民主主義者ではあったが、決して社会主義者ではなかったのだ」⁽⁵⁾

長い引用文になってしまったが、ここに表出されているミルの考えは、かれの『論理学体系』や『経済学原理』を理解していく上で重要な鍵を与えてくれるように思う。この引用に続けてミルは、「われわれの前進の究極の理想は、はるかに民主主義の域を越えて、はっきりと社会主義という一般の呼称のなかにわれわれをおくものであった」⁽⁶⁾とさえ述べている。こうした言葉から想像するかぎり、たとえ社会主義という規定にまだ曖昧さが残るとしても⁽⁷⁾、ミルのなかで、それまでの私有財産を前提にした経済学全体に対す

る疑問あるいは不信というものが生じていたと考えることができるだろう。さらにまた、かれ自身その行きすぎにたいして反省を表明しているにもかかわらず、ベンサム主義からの距離もけって無視できるほどのものではないように思われる。財産の不平等や遺産相続性にたいして疑問をなげかけ、生まれながらにして富裕であるか貧乏であるかということにたいしてはこれを不法と呼び、社会制度の根本的改革の必要性と可能性とを考えるミルは、たしかに古い経済学者とは異なった新しい経済学の方角へと向かっていたということができるかもしれない。

このミルの新しい思想的立場は、いつ頃どのようにかれの中に芽生えてきたのだろうか。先にも触れたように、ミル自身が経済学にたいしてなんらかの発言をするようになったのは、「経済学の定義と方法」という題で残されている論説の草稿を書いた1830年頃と考えることができる。もっとも厳密には、1819年、かれがまだ13才のとき、父ジェームズ・ミルからリーカードの『経済学と課説の原理』を毎朝の散歩のときに講義され、それをミルがノートにとり、のちにそのノートをもとにして父ミルが『経済学綱要』を出版したという事実があるが、これはまだミルの独自の経済学研究とは言いがたい。『自伝』によれば、ミルは1825年頃、友人のグロートの家で10人前後の人数で経済学についての研究会を行っていたことが記されている。そこで対象は、ジェームズ・ミルの『経済学綱要』やリーカードの『原理』さらにはベイリーの『価値論』といったものが挙げられ、その研究会での討論からかれの「国際価値論」や「利潤および利子論」といったものが生みだされたとも述べられている。またこの時の研究会では、経済学についての討論がおわった後、三段論法的論理学についての討論も行なわれて、これがのちの『論理学体系』の第一編でのスコラ哲学の検討へとつながったとも書かれている⁶⁾。こうしたかれの経済学や論理学にたいする研究も、1826年の秋に突然かれを襲った「精神的危機」で中断され、それが新たに始められるのは、1830年前後の頃からと考えられる。

1830年7月に、フランスでは7月革命が勃発したが、その前後の時期のミルの心境について、今後の叙述と関連するところを『自伝』のなかから若干ひろってみよう。この頃のミルは、サン・シモン派の思想やコントの思想か

ら最も多くの影響を受けており、個人的にもかれらと接触し直接に意見の交換を行なっている。またドイツ古典派なかでもゲーテからも思想的影響を受け、かれ自身、「ゲーテの銘の句『多面性』はこの頃のわたしが、なろうことなら喜んでわたしのものにもらいたいのと思った句であった」と述べているほどである。サン・シモン派の思想がミルに与えた影響で、いまここで一番問題になるのは、やはり私有財産や経済学に対するそれ以前の彼の考え方の修正という点での影響だろう。かれの言葉でその個所を示してみよう。「わたしは1830年にかれら（サン・シモン派——引用者）の主領格のバザールとアンファンタンにも紹介され、かれらの公開講義が続いたかぎりには、かれらの書くものは殆どすべて読んだ。普通の意味の自由主義思想に対するかれらの批評には、重要な真理が多分に含まれているようにわたしには思えた。私有財産や遺産相続を動かしがたい事実と考え、生産と交換の自由を社会改良の最後の切札と考える古い経済学は、きわめて局限された一時的の価値しかもたぬことに初めてわたしの目が開いたのは、なかばかれらの著作によることであった。（中略）かれらの手段はたとへ無能力でも、かれらの目標だけは望ましい合理的なものと思われ、かれらの考える社会機構が実行可能だとも利益を上げるように働くともわたしは思はなかったけれども、そのような人間社会の理想を天下に宣言すること自体が、現在のような組織の社会を何かの理想的標準のほうに近づけようとする他の人たちの努力に、有益な指針とならざるにはいないだろうとわたしには感じられた」⁽⁹⁾。

ミルにとってたしかにこの時期は、思想の発展のある種の転回点であったことは間違いない⁽¹⁰⁾。先にも引用したように、ミルは、のちになってこの時期にかれが示したベンサム主義への批判が「行きすぎ」だったとは述べているが、しかしにもかかわらずこの時期がかれにとっての転回点であったことは、かれ自身も否定はしていない。特に経済学にたいするかれの立場はこの時期に形づくられ、それがより展開していったともいうことができる。「自伝」からの引用ばかりがつづくが、古い経済学とは異なるかれ自身の経済学の成立にかかわるかれの言葉を引用してみれば次のようなものがある。「1830年と31年とにわたしは五つの論文を書いたが、これはのちに『経済学の未解決の若干の問題についての論文集』という題で出版した。この論文は、1833

年に第5の論文を一部書き改めた以外は、最初から殆ど今日見られるとうりの内容であった⁽¹¹⁾。ここからも想像されるように、少なくとも経済学に対するミルの姿勢は、1833年以降大きな変更はなかったと言える。そして、ここで言われている「第5のもの」というのが、今ここで問題にしている「経済学の定義と方法」という論文である。この論文は、これだけ単独に1836年10月に『ウェストミンスター評論』に発表されたものでもある。このように見てくると、ミルにとって1830年の7月革命前後の時期というのは、その後のかれの思想に大きな影響を与えていくものだったと言っても差し支えがないだろう。さらにまた7月革命そのものもミルの心を大きく動かしたようであらう。かれ自身革命勃発後すぐパリに赴き、「過激な人民党の活動的な指導者」⁽¹²⁾の何人かと直接話し会いを行なってさえた。

1830年前後から1848年までのあいだには、ミルの思想の発展を考える上では、まだ見落とされてはならない紆余曲折——たとえばカーライルとの友情⁽¹³⁾とその挫折に象徴されるようなベンサム主義への回帰——があるが、少なくとも古い経済学にたいする批判すなわち私有財産制や遺産相続にたいする批判は、この間一貫して維持されていくと言える。もっともかれの場合、私有財産制にたいする批判も、どちらかというところ、これがもたらしている道徳的退廃のゆえのそれであるというような趣はある。『自伝』の1830年前後のかれの心境を描写している個所で、かれは、国の道徳を低下させているものとして、一つには政府による公共の利害の私物化を挙げ、次いで第二の理由として、この私有財産＝富の存在を挙げこれを以下のように批判している。

「さらに第二に、この方が一段と大きな理由だが、大衆の敬意というものは、常にそのときの社会の現状において権力への一番の近道になっているものに捧げられがちなものであり、英国の制度下にあつては、世襲のものにせよ自分の一代で獲得したものにせよ富が殆ど唯一の政治的権力の源であったのだから、富あるいは富の印が本当に尊敬される殆ど唯一のものとなり、国民の一生は主としてそれらの追求に捧げられるということになった点である」⁽¹⁴⁾。そしてこの弊害から人々を自由にするためには、「オーエン流、サン・シモン流、その他何流でもよい、とにかく私有財産を批判する考え方が貧しい人々の階級に広く普及することを熱心に期待した」⁽¹⁵⁾とまで述べてい

るのである。

たしかにミルの私有財産にたいする批判には、厳密に考えれば、その限界が指摘されねばならないところが多々ある。しかしたとえそうであるとしても、かれの思想的営為の中で私有財産批判という課題は、極めて重要な課題であったことも否定できない事実である。だからここでのわたしの課題は、かれのそうした批判がどのように組み立てられていったか、そしてそれがかれの「経済学」の叙述を、それ以前のものに比べてどのように変えさせることになったかを見ていこうとするのである。ここで言う私有財産批判ということは、言葉を換えて言えば「経済学」批判ということと同義だとも言える。それゆえ、わたしのここでの作業は、かれの「経済学の定義と方法」に内在しこれを「経済学批判」として書かれたかれの最初の論文として捉え、そこでの既成の経済学にたいするミルの批判をできるだけ丁寧に追っていくことである。そしてこれは、一般に「経済学批判」というものを考えていく上での「一つ」の可能性を示唆してくれるようにも、わたしには思われる。

(2) 経済学の定義

この「経済学の定義と方法」という論文の冒頭で、ミルは、ある特定の科学の定義というのは、一般には、あたかもその科学に先立って規定されていて、その上に順次その科学が演繹的に叙述されてきたかのように考えられていることにたいして、そうした考えの誤りを指摘して次ぎのように言っている。「それ（定義をその中に含む第一原理）は、他のすべての真理がそこから演繹されるかのように説かれているけれども、それは最後に到達するところの真理、一般化の最後の段階の結果、またはこの科学の特殊の諸原理がその性質に特有なる証拠によって予め確かめられた後に従属せしめられるところの最後の、最も微細なる分析過程の結果なのである⁽¹⁰⁾。

ミルの言葉を若干敷衍すれば以下のようになるかもしれない。確かに今までにも種々の科学が存在しているが。そうした科学は、別に科学としての厳密性のために科学として登場してきたものでもない。それが成立した時には、それぞれ特殊な問題があってその問題に答えるために、それぞれ後に科学

として呼ばれるようになるものが登場してきている。だからその科学のうちの個別的あるいは特殊な真理——当面の問題に答えるという意味での真理——については極めて明晰な叙述がなされるにもかかわらず、その特殊な真理をそこから演繹的に導きだすための定義あるいは第一原理にたいしては、それが創りだされる方法もそのための基本的な考え方も不備なままで残されていて不思議ではない。もし、このようなミルの考え方を経済学という科学に適用したならどうなるか。例えば差額地代論とか利潤論というのはさしずめ上の場合の特殊な真理に該当するだろうし、第一原理というのは——たとえ今はそれが曖昧なまま残されているとしても——それらの真理がそこから演繹されるべき何かあるものだということになるのだろう。そして事実、経済学の中でも、第一原理の曖昧さとは対比的に、そうした種々の特殊的真理は極めて精巧に創りあげられてきている。しかしミルがここで問題にしようとしているのは、まさにそうした特殊的真理のいわば寄せ集めの存在でしかない経済学を、科学として再構成しようと試みることだったと言える。だからミルが、先の引用文の中で、こうした第一原理は、実際には最初ではなく最後の原理だと述べる背後には漸くその様々な特殊的真理が出揃い、それらの一般化というものが可能になった最終局面に今自分がいるというミル自身の自己規定があると言える。というより、ヨリ正確には、現実の経済学が、確かにその個々の特殊的真理としての正確さは認められるとしても、逆にそれゆえにその特殊的真理としての自己規定を見失い、あたかもそれですべてであるかのように傲慢に振るまっていることへの反省を、ミルは意図していたと言えるのではないか。だからミルが次ぎのように言うとき、それはかれのこうした意識の控え目な表現ということができるだろう。「他の諸科学と同様経済学も、厳密に論理的な諸原理の上に組み立てられた定義を、あるいは定義されるものと同じ広がりをもつ定義といったものさえ——これは比較的容易に手に入る——今まで持ってきていない。これがためにこの科学の真実の境界をその実践的なところで誤解したりまたはそれをはみ出したりすることは、少なくともこの国ではなかったかも知れないが、しかし、これがために、この科学が研究されるべき様式についての不明確な、しばしば誤れる概念を生じさせることになった——というより恐らくむしろそのことが不

明確で誤った概念と結びついていたというべきだろう」⁽¹⁷⁾。このように述べてミルは、それまでの経済学——主要にはアダム・スミスとデイヴィッド・リカード⁽¹⁸⁾ だが——での定義の検討と、それによって惹き起こされた概念の混乱あるいは誤用を批判していこうとするのである。こうしたミルの思想的営為は、情況こそ異なるとはいえ、ヘーゲルの「ミネルヴァのふくろう」を思い起こさせるものといえる。

かれが第一に挙げてくるのはスミスの定義である。すなわちスミスに従えば、経済学とは、一国民を如何にして豊かならしめるかを教え、あるいは教えると言いきる科学だということになる。しかしこれが果たして科学の定義と言えるだろうか。スミスの定義とは、定義というものがそれによって組み立てられるべき言葉・概念によって組み立てられたものでもないし、ただ日常生活における種々の出来事を話す数多くの話し方をそのままそこで抽象して行って得られたものにすぎないのではないか。だからミルは、そこでは科学と技術が混同されていると批判するのである。「これら二つの観念(科学と技術のイデオ——引用者)は、あたかも悟性が意志と異なり、また文法上の直接法が命令法と異なるように、相互に異なったものである。一方は事実を、他方は訓言を取り扱う。科学は真理の集成であり、技術は行為のための準則または指針の一体(a body of rules, or directions for conduct)である。科学の言葉はこれは何々である、またはこれは何々ではない、これは起こるまたは起こらないである。技術の言葉は、これを為せ、あれを避けよである。科学は一つの現象を認識しその法則を発見しようと努め、技術はある目的を立ててこれを実現する手段を求める」⁽¹⁹⁾。

スミスの経済学の場合、確かにかれの叙述は作用因からの説明で因果律を構成はしている。そしてかれはそれをあたかも自然法則でもあるかのように提示している。そのためそこでの経済学は、たんなる特殊のあるいは階級的利害を表明するものではなく、市民社会全体の富裕化の道を指示するものでもあった。だから形式的に見るならば、スミスの経済学そのものは決してミルの批判するような科学と技術の混同というような構造にはなっていない。人間的自然=human nature をその基礎にして、まさにそれを第一原理としてその上に演繹されているのがスミスの経済学だったといえる。しかしミル

は、このスミスの人間的・自然的なものの中にいわば形而上学的質を鋭く見抜いていたと言えるかもしれない。1838年に出版した『ベンサム論』の中でも、ミルはベンサムの細別法を評価しつつ、ベンサムのこの方法がそれ以前の倫理学や政治学が前提していた曖昧な成句——このなかには自然法 (the Law of Nature) も含まれている——を打ち壊すのに有効であったと述べているが⁽²⁰⁾、ミルがスミスの経済学を上のように捉えて批判する背後には、こうしたスミスの叙述の方法全体への批判があったと考えることができるだろう。ミルの時代は、既に「科学」の中に形而上学の入る余地がなくなりつつある時代であり、だからこそ方法論の必要が求められていたのだとも言える。

ミルが二番目に批判の対象として出してくるものは、リカードの経済学の方法である。「教養ある人々の間に最も一般的に受けいられていて、この主題に関する専門的著述の大部分のものの巻頭に掲げられている定義は次ぎのごとき主旨のものである。経済学とは、富の分配・生産・および消費を規律する法則をわれわれに教えるものであると」⁽²¹⁾。これに対してミルは、確かにこの定義では、経済学が科学であって技術ではないということ、さらにそれが関係するものは自然の法則であって行為の格率ではないということを示されていると、一応の評価は行なっている。この定義に対するミルの批判はここでは余りにも曖昧な言葉が無規定的に前提されていることに対してである。富という言葉にしても、あるいは富の生産とか分配とか——ミルは消費の法則ということについては、これを認めない——という言葉にしても、そこには曖昧なものが多く含まれすぎている。例えば富の生産をとってみても、それを素材として考えるなら、穀物の生産の場合なら生物学の法則が入り込んでくるし、製造業の場合なら物理学や科学の法則が不可欠のものとなる。しかしこれらがすべて富の生産の法則の中に含まれるとしたなら、経済学が網羅しなければならない範囲はあまりにも大きくなりすぎるといえる。ミルの言葉で言えば、これでは経済学という科学が「どこで終るかを断定することが困難になる」⁽²²⁾。定義という言葉が definition (限定すること) である以上、こうした定義は定義として失格と言わざるをえない。

では富の生産を考える場合、ミルは何をもって経済学とそれ以外の科学とを区別しようとするのか。少なくともこれを区別するものが、対象そのもの

から与えられることはない。小麦は経済学にとっても生物学にとってもあるいはまた他の科学にとっても等しくその科学の対象であるし、小麦がこれらの科学を区別することはできない。とすればこの区別は人間のその対象への関わり方あるいはこの人間にそうした関わり方をさせることになるような共通の条件を前提にして、構成される必要があるだろう。ミルの中ではこれは具体的には人間の知識の質の違いとして表象されている。「人間の知識のすべてに到達せる、または到達しうべき全分野に思いをいたすとき、われわれはそれが明白に、かついわば自生的に二つの部分に分離し、それらのものが相互に極めて著しく対立と対比の関係にあるがためわれわれの知識のすべての分類において常に引き離されていたことを知る。それは、すなわち、物理的科學、および道徳的または心理的科學である」⁽²³⁾。

ミルが上に言うところの道徳的または心理的科學というのは、人間が自然に働きかけるときの、この働きかけられる自然の側のそれではなく、働きかける人間の側の法則のことであり、精神の法則とも言われている。「精神的または道徳的諸科學とは、精神の諸法則、および精神の諸法則に依存するかぎりのすべての複合的諸現象を論ずるものである」⁽²⁴⁾。すなわちこの精神的科學は、たんに純粹に精神の法則ばかりを扱う科學ではなく——なぜならすべての現象から自然的法則を抜きに精神的法則のみを取り出すことは不可能だし無意味でもあるのだから——種々の現象について、自然的科學が取り扱う範囲を越えてそれらの現象が人間の精神的領域と関わる領域を、自己の固有な対象とするのである。このように考えるがゆえに、ミルが出してくるヨリ嚴密にされた經濟学の定義というのは、「人間の諸法則に依存するかぎりにおいて富の生産および分配を論ずるところの科學」、あるいは「富の生産および分配の道徳的または心理的諸法則に関する科學」ということになる⁽²⁵⁾。

しかし、この新しい定義にしてもまだ曖昧なところを残している。人間の性質というが、この場合でも人間の置かれている状態によってそこに発現する性質は異なるはずだし、このままではこの規定にしても曖昧だといえる。このように考えるミルは、それゆえ人間の性質というものを三つの条件のもとで考察し、經濟学の取り扱う人間の性質というものを規定しなおそうとする。すなわち孤立した個人としての人間の性質と、どのような時と所におい

でも人間が自己の自然な感情によって作りあげていく人間関係の中で現われてくる性質と、そして最後に社会状態を前提としてそこでの生活によって培われる人間の性質という三つのものである。そして結論的に言えば、経済学が対象とする領域は、第三の社会状態における人間に固有な性質に関わる生産と分配の法則ということになる。

ミルが人間の性質の考察に際して、これを三つの条件のもとで考察しようとしていることは、一見常識的ではあるが、しかしある意味では極めて示唆的ということができる。少なくともミルはこれら三つの条件の違いによって、そこに発現する人間の性質が異なることに注意を促していると言える。孤立した人間の場合というのは、概して人間を考える場合の前提ともいべきものであり、かれ以前の哲学や人間学においても種々取り上げられているところであるが、ここでは主要にはベンサム哲学が念頭に置かれていると言える。二番目のそれは、道徳哲学あるいは倫理学といったものが対象とするような関係とそこでの人間の性質とであり、アダム・スミスに代表される道徳哲学をイメージすることができる。またこれは、ミルが直接そのような意図を持っていたとは言えないにしても、マルクスにおける類概念の世界と重ねて読まれるなら、次ぎの社会的な人間の性質の領域は、さしずめその疎外された世界として読まれることも可能になるかもしれない。少なくとも、ミルが、上の二つの領域での人間についての科学を、第三の社会状態で人間についてのそれと区別しているところは、かれの積極的な主張として読まれるべきものだろう。

『ベンサム論』のなかでもミルは、ベンサムの人間把握にたいし、これを厳しく批判していた。すなわち、ミルは、あらゆる思想家についてまず第一に発せられるべき質問は、人間の生活 (human life) というものに対してその思想家がどのように考えていたかということだとして、具体的にベンサムを批判して次ぎのように言っている。「ベンサムによれば、人間は快樂と苦痛を感じる存在であり、人間のあらゆる行為は、ある程度までは私利が様々な変形したものと、普通利己的と分類されているもろもろの感情によって支配され、ある程度までは他の存在に対する同感ないし時には反感によって支配されていると考えられている。そして人間性 (human nature) に関する

ベンサム概念はここでとまってしまっている」⁽²⁶⁾。だからミルは、このベンサムの理論の有効性というものは、所詮個人としての人間のうちの極めて狭い領域、すなわち「世俗的な思慮分別と表面的な正直と親切」の領域で若干の指示を与える以上には、殆ど何の役にも立たないと言うのである⁽²⁷⁾。そのうえミルは、「人の生き方 (human life) に関するベンサムの理論が、個人のためには、これほど僅かの貢献しかなすことができないとするならば、それは社会のためにどんな貢献をなすことができるのだろうか」⁽²⁸⁾ と、このベンサムの人間性に対する理論が社会状態での人間に対しても殆ど役に立たないと述べるのである。

少なくともミルの場合、孤立して考察される人間に関する科学と一定の人間関係の中で考察される人間に関する科学とを区別していることは注意される必要がある。ベンサムではこの二つの科学の間には質的な違いは認められておらず、そこでの社会は概して「大文字で書かれた人」というように叙述される。これに対してミルの構想している社会は、孤立した個人とは異質なものをそこでの構成員の質に賦与し、なおかつその社会自身が社会として独自の質を持つものだといえる。しかしそのようには言っても、社会の質という言葉で表象されるものは非常に広い意味を持っている。例えば『ベンサム』論の中でかれが言及していた国民性格 (national character) というようなものから、これから出てくる経済学の対象としての物象化された世界までが、極めて異質なものまでもこの中に含まれているとさえいえる。それゆえこの様々な集団あるいは社会の質について、ヨリ厳密な規定を考えていく必要がある。

孤立した個人とは区別される集団の中での個人にしても、ただ集団ということだけで自動的にある特定の科学の対象になるわけではない。そこに作られている集団あるいは社会の質の相違によって、そこでの個人は当然異なった質を持つ人間として登場してくるし、これを扱う科学にしても、その集団・社会のあり方に応じて異なった科学を形成していく。ミルが第二の理由として挙げた「他の人間と接触するものとしての人間」という規定は、いわば人間の集団化の一般的原則が適用される領域での人間といえる。だからそこに生じるもろもろの感情、例えば感動・良心あるいは義務の感情また賞賛欲

といったものは、こうした集団の中で個人が、自分を他者との関係の中で存在する個人として自覚していくような普遍的な感情だったと言える。それゆえミルは、こうした感情とか行為に関する精神的科学を道徳学あるいは倫理学と呼んだのだと言える。そしてミルが、道徳学・倫理学から経済学を区別しようとするのは、こうした人間的・普遍的な集団化の領域——マルクスの類概念と重ねて読むことも可能ではないだろうか——とは区別される一つの特殊な質を持った社会として「経済学」が扱う領域が歴史的に登場してきたという認識にミルが立っていたということの意味していたとも言えるだろう。そしてここに、ミルが、それまでの経済学とは異なるかれ独自の「経済学」の必要性を感じた理由があり、さらにまたこのように分類するがゆえに経済学の定義が、それ以前の経済学の叙述の最後に現われるという立場をミルが取ることになったと言える。

アダム・スミスの場合には、道徳哲学から経済学への道は極めて自然に作られていた。慎慮・正義・仁恵といった美德にしても、他者との共感という個人の社会化のための大前提のもとで、市民社会における自立した諸個人をもたらすものとして構想され、その自立した市民社会は、そこでの分業をもとにした生産力によって、その物質的基盤——そればかりか、分業のもつ共同作業への自覚によって、市民社会の精神的基盤すらを——も与えられていた。しかしまさにその意味で、ミルは、そこにおける技術と科学、命令法と直接法との混同を見ている。これは先に批判されたベンサムにもその責任の一半はあるのだが、それよりも現実の歴史過程そのものが、スミスにあったような道徳哲学と経済学という二つの科学の間の調和を崩してしまったというべきだろう。スミスの道徳哲学の中では、たとえ慎慮や正義に重きが置かれてはいたとしても、しかしまだ仁恵という社会愛の美德によって、慎慮や正義といった功利主義原理の原形ともいうべきものとは区別される領域が、言い換えると個人とは区別された社会に固有な領域が残されていた。そしてこれは同時に、市民社会とは区別された国家の存在をも、たとへその範囲は小さいものであるとしても、許容するものであった⁽²⁹⁾。

しかしミルの現実には、スミスのそれとは全く異なっていた。比喩的に言えば、スミスでは、経済学は道徳哲学に裏打ちされて初めて成立しえていたの

に対し、ミルにとっての現実、これとは逆に、経済学こそが全能であり倫理学や道徳哲学は経済学から演繹されるべきもののようにしか考えられなくなっている状況だった。例えばミルは、こうした倫理学と経済学との関係を、以下のようなベンサムへの批判の中で示唆している。「ベンサムの関心が本来の倫理学研究よりもむしろ法学の方向にあったことは、世界にとって幸運なことであった。倫理学の研究書でかれの名のもとに出版されたものは、『倫理学』(Deontology)——われわれの経験によれば、ベンサムのどの崇拜者といえども、この本に言及する場合には、殆ど常にそれが陽の目を見たことを深く遺憾に思うと述べないものはない著書であるが——を除いて何もなかった。もちろんわれわれはベンサムから倫理学についての正しい体系的見解を聞くことは期待しなかったし、また人間の心情についての深遠な知識を欠いては、その道徳原理を理解できないような問題に関して正当な取り扱いも期待しなかった。しかしながら、われわれは……少なくとも既成の諸見解に対する徹底的な批判が遂行されているであろうということを期待していた。したがって、殆ど抹消的な道徳のみが取り扱われ、しかもこの上なく術学的な綿密さでもって、また商売を規制する報酬の原理に立脚しそれがなされていようとは、われわれの予期しないところであった」⁽³⁰⁾。

長い引用になってしまったが、少なくともこうした文章からは、ミルがこの「経済学の定義と方法」という論文の冒頭で述べていた当時のイギリスの経済学への控え目な批判——「経済学の真実の境界をその実践的なところで誤解したりまたはそれははみだしたりすることは、少なくともこの国ではなかったかも知れないが」という批判——は、そこでの言葉の控え目さとは裏腹に、極めて強くかれを動かしていたことが想像されるだろう。要するに経済学を成り立たせているような独自の領域が現実的に完成し、しかもそれが人間生活のそれ以外の領域をも包摂しようとしている状況こそが、ミルにとっての現実だったと言える。もっとも、歴史的に見ても、「社会状態」というものは次第に「商売を規制する報酬の原理」で一元的に捉えられてこざるをえないのは、否定できないことではあろう。そしてミルが、人間を考察する際に挙げてくる第三の条件、すなわち社会状態における人間とは、経済学を成り立たせてきたこういう領域をもまだそこに含んだ少し広い意味での社

会、その社会における人間のことを指している。だからそこには、本来まだまだ単純に一元的には捉えきれない種々の要素が含まれているはずだったし、ミルの時代においてもまだそれらのうちの若干は残されていたことと思う。だからミルは、経済学の領域をもそこに含んだ「一個または数個の目的のためにする人間の結合または集団」としてこの社会状態を規定し、それを扱う科学を思弁的政治学と呼んだのである。

経済学という科学は、この思弁的政治学の一部門を意味している。「現今経済学という言葉によって普通に理解されているところのものは、思弁的政治学ではなくてこの科学の一部門である。それは、社会状態によって修正された人間の性質の総体を論ずるものでもなければ、また社会における人間の行為全般を論ずるものでもない。それは、ただ富を所有せんと欲し、かつこの結果を得るための諸手段の比較的有効性を判断しうるのみの人間のみに関係する」⁽³¹⁾。このように単純化された人間のみを取り扱っているにもかかわらず、というよりまさにそれだからこそ、「経済学」が社会科学——少なくともそれは思弁的政治学の一部門としてあったしまたそうであるはずなのだから——としての存在理由を持つのだという判断は、どこからくるのだろうか。

思弁的政治学の社会に対する関係は、ミルに言わせれば、解剖学や生理学がわれわれの肉体に対して持つ関係のようなものとされている。「この科学の社会全体に対する関係は、解剖学および生理学の肉体に対する関係と同じである。それは、人間はその性質のいずれの原理に誘われて社会の状態に入ったか、かれの立場（場所）におけるこの特徴は、どのようにかれの利害と感情とに作用しまたそれらをとうしてかれの行為に作用するのか、如何にその連合は次第にますます緊密になる傾向をもち、協同はますます多くの目的に拡大されるか、これらの目的とは何であり、またこれを促進するため最も一般的に用いられる様々の手段とは何であるか、社会的結合の通常の帰結として人間たちの間にたてられる種々の関係とは何であるか、社会の相異なった状態において相異なった諸関係とは何であるか、これらの状態はどういう歴史的順序をなして相互に相継ぐ傾向をもっているのか、および、それぞれのものが人間の行為と性格とに及ぼす効果とは何であるかということ明らかにする」⁽³²⁾。ここに引用した思弁的政治学の規定は余りにも多岐にわたっ

ていて、およそ社会とそこでの人間の在り方全般をまで自己の対象としている。人間が社会という状態に入っていく理由、そしてそこで新たに社会的存在として賦与された質によってどのような行動をとることになるか。その中で集団としてのきつなは次第に強固なものとなり、そこでの協同 (co-operation) も一層種々の新たな目的へと拡大されていく。そしてそこに現われる新しい場としての人間関係およびその歴史的な生成はどうなるのか。以上、ここに網羅される領域は、人間の社会生活全体をその射程に収めているとも言える。だからミルが、この領域に関わる科学を思弁的政治学と呼び別名社会経済学 (social economy) あるいは社会の自然史 (the natural history of society) と呼ぶのも理解できるところである⁽³⁹⁾。

ただここで注意されねばならないのは、いま上で述べてきたような思弁的政治学と呼ばれた科学こそが、それまでの経済学すなわち本来の political economy だったということである。しかしすでにミルの時代には、この political economy という言葉で表わされる科学が、その本来の広範囲な意味を失ってしまっているという認識がミルの中にはある。ミルの判断によれば、先にも引用したように、political economy という言葉で表わされている科学は、ただ富の所有を目的としそのための手段の有効性を問題にしている人間にしか関係しない科学になってしまっている。ミルがここで具体的にその名前を出して批判しているセーの場合、かれは、すでにそうした事態が進行しているにもかかわらず、political economy という言葉を、先にミルが挙げた social economy の領域に冠しようとしていた。しかしこれは、ミルに言わせれば現実の political economy の質と限界とを越えた命名法であり、経済学の傲慢さを結果させる恐れがあった。その上、このことは、political economy を科学として整備する努力を続けているミルにとっては、いわばそうした努力の放棄として映ったとしても不思議ではない。

ミルにとっての経済学 political economy の定義づけの問題は、いま漸くその輪郭を現わし始めている。たしかにかれは、経済学がかったような広い意味を失い、そこで扱われる人間は単に富の獲得と消費にのみ従事している存在になり下がっているという事実から出発していた。ただミルにとってこの事実が問題になるなり方というのは、かれ独自のものである。かれの場

合、単に富の獲得だけを目指す存在としての人間に対してはもちろん否定的であるが、しかし、だからといってこうした存在そのものを否定するという発想法はとらない。たしかにかれは、いわゆる物化された関係の中での人間を見ているが、かれはあくまでもそれを経済学 political economy の中に限定し、それによってそれ以外のところでの人間存在に、その関係からは自由な領域を保証しようとしているといえる。以下に、かれのこうした考えを示してくれる引用を挙げてみよう。(若干、前に挙げた引用と重複するが、不体裁をかえりみず引用してみよう。)

かれは次のように言っている。「現今経済学 political economy という言葉によって普通に解されているところのものは、思弁的政治学ではなくて、この科学の一部門である。それは、社会状態によって修正された人間の性質の総体を論ずるものでもなければ、また社会における人間の行為全般を論ずるものでもない。それは、ただ富を所有せんと欲し、かつこの結果を得るために諸手段の比較的有效性を判断しうる人間のみに関係する」⁽³⁴⁾。だからここではその他の人間の感情とか動機は捨象されていて、わずかに、労働に対してできることならその苦痛を避けたいという感情とか、未来にではなく現在贅沢をしたいというような欲求のみが——これら二つは富の追求への反対に働く動機と考えられるので——若干考慮に入れられるだけである。それ故、「経済学は人類をただ富を獲得し消費することのみに従事しているものとして考察し、かの動機が、上に挙げた二つの絶えることなき反対動機によってある程度抑制されるのを除外して、そのすべての活動の絶対的支配者である場合、社会の状態をなして生活する人類が進ましめられるところの活動の経路が何であるかを明らかにすることを志す」⁽³⁵⁾。

再び長い引用になってしまったが、要するに富すなわち私有財産に拝跪する限りでの人間を取り扱おうとするのが、経済学 political economy の役割だということである。ヨリ少ない富よりもヨリ多くの富を求めて行動する限りでの人間の行為は、少なくとも科学的に知ることができる。もちろんミルは、人間の行動の動機は、富の追求からばかり与えられるはずがないと考えている。しかし現実には、人間の全行動がそこからしか動機づけられないような時代になっていることも、かれの『文明論』以降の諸論文を見れば、容易に

読み取られる。そしてそのような存在としての人間の行動をそれとして純粹に抽出してきて、それを経済学という科学の対象として取り扱おうというのである。そしてこれは、かれが述べるように、「如何なる経済学者も、人類が実際にこのようなものとして構成されているとあって考えるほど愚かであったというのではなくて、これが科学というものが必然的に進んでこなければならなかった様式だからなのである」⁽⁹⁶⁾。ここにおいて初めて、現実過程ばかりではなく、知の体系の中におけるこうした抽象化というものの、社会全体あるいは全的な社会認識に対する関係が、たとえまだ明確とは言えないまでも規定可能になるのである。すなわち、社会の中の人間の行動を考える場合、そこには複雑にからみあった動機というものが存在することは否定できない。しかしだからといってそれらすべての動機を、ある行為を生みださせた同等の動機として考慮していくなら、たとへそこに得られるものが事実の描写であるとしても、それは混乱を混乱として映したにすぎない。現実の傾向とそれを映し出している科学あるいは知の体系の進んでいる道とを把握し、その上でかれがこの「経済学の定義と方法」の冒頭で挙げていた第一原理を抽出し、そこに科学の再構成の道が求められねばならない。そしてこうしたかれの試みの背後には、まだ曖昧さは残るものの、歴史過程そのものを一つの抽象化の過程として捉え、その結果、今ここに現われてきた第一原理をそのようなものとして構成し、その上に経済学を演繹的に叙述しようというかれの意図があることに注意する必要がある。

かれの場合、知識や教育というものの社会の動きに対して持つ力あるいは役割が極めて重視されていると言えるが、ここでもかれのそうした立場は維持されている。現実の社会そのものを変えようとしても、そこにはそれを生みだしてきた歴史過程が否定できない事実としてある。そして「富の生産」ということに限って考えても、たしかにかつてはこの行為の中に人間的自然が全面的に開花しうるようなところが見い出せたかもしれない。そしてそこでなら人間の多面的で具体的な在り方が導きだされたかもしれない。しかしミルの時代には、この同じ「富の生産」という行為からこのような人間の多面的な開花などということとはとても考えられないことであった。それどころか、上にもあるように、この「富の生産」という行為こそが、人間の抽象化を不

可避にするものになってしまっている。だからもし political economy というものに、かつてと同じような全的な社会認識としての演繹科学の質を与え続けるならば、それは人間のヨリ一層の抽象化を必然にってしまうであろう。だからこそかれは、この political economy を social economy の一部門として限定し、そこに演繹される世界をも人間の社会生活全体の中で相対化していこうとしていると言える。たとえそうしたかれの意図が現実には十分実現したかどうかは別としても、こうしたかれの思想的営為そのものは、かれの中では十分実践的な意味をも持つものであったと言わねばならない。それゆえミルは次ぎのように、この経済学の定義についての叙述を締め繰くろうとする。

種々の動機で動かされている人間を考える場合、「かれに対してそのように競合的に作用する様々な欲求や動機や嫌忌のもとでかれがどのように行動するかを判断するには、われわれは、かれがそうした種々の動機のそれぞれどれか一つのものに排他的な影響のもとで、どのように行動するかを知らねばならない」⁽³⁷⁾。具体的にここでの問題にそくして言い換えれば、富の獲得を人間にとってのあたかも唯一の目的であるかのように仮定して、ミルの目の前にある社会での人間について、推論を進めることが必要になっているということである。そしてここに登場する科学が、ミルの考える「経済学」である。だからかれがここで提起した経済学の定義とは以下のようになる。「社会の諸現象のうち富の生産のためにする人類の結合された諸操作から生ずるものの法則を、これらの現象が他の何らかの目的の追求によって修正されない限りにおいて、追求するところの科学」⁽³⁸⁾。これがかれのこの時点での結論である。

古典派の流れの中にあるミルにとっては、「歴史」を捉えるという作業は、たとえどのようにコールリッジやドイツ哲学を学んだとしても、そこにはやはり一定の制約のようなものがあるのも否定できない。かれにとっては、「歴史」は依然としてあくまでも「自然」な流れでありつづけている。「社会の自然史」とかあるいは「科学というものが必然的に進んでこなければならなかった様式」といった言葉からも想像されるように、ミルの中では「歴史」は、われわれに認識されるのを待っている「真理」をその中に持つ「自

然的秩序」でありつつけている。確かにかれはベンサムを批判し、人間性を固定的に捉えることは拒否している。しかしにもかかわらずかれが「歴史」の中に一貫して流れつづける論理を想定する限り、行為する主体としての人間は後景に追いやられ、認識する主体としての人間のみが前面に出てくるのも不可避であった。かれの思想的営為がマックス・ヴェーバーのそれに見ても、極めて近くにあるように見えながらも、両者の間に越えることができない溝が存在する理由もここにある。それ故、ヴェーバーが行為する主体と認識する主体の緊張の中でかれの社会科学の方法を練り上げていったのとは対照的に、ミルの場合、認識主体をできるだけ自然的・客観的に——心理学から性格学を経て——組み立てていこうとしたとも言える。すなわちミルにとっては、一般に科学というものは、時間とともに細分化されそれとともにそれぞれに抽象化されていくものと考えられている。だから認識主体も、その科学に課せられたと同じプロセスを自らに課すことによって「真理」に到達しうるとされているといえる。それ故ここでミルが言うような人間の「目的」にしても、それは、人間のそれであるにもかかわらずあくまでも客体から与えられた合理的な「目的」でしかないし、それ故それは科学的に認識可能な領域に属するものであった。少なくとも、今ここで得られたかれの経済学の定義は、こうした文脈で理解されるべきものと言える。

(3) 経済学の方法

さて、上のように経済学に対する定義が与えられた以上、次ぎには、これに基づいてその方法が問題にされなければならない。しかし方法とはいっても、これが経済学の定義と無関係にあるわけではないのは当然である。前節で与えられた定義に特有な方法としてこれは提起される必要がある。前節で見たようにミルの経済学の定義とは、極めて抽象化された人間——ヨリ少ない労力でヨリ多い富の獲得を目指す人間——をその基礎に置いて成立する領域であったが、ここからも想像されるように、かれの経済学の方法とは、こうした抽象的な前提の上に叙述を積み重ねていくという、いわば演繹的な方法ということができる。まずかれの言うところを見てみよう。

前にも少し触れたが、ミルは経済学に対するスミスの規定を、技術と科学との混同だとして批判していた。しかしそこでは科学と技術との違いはすでに前提されていてその内容については殆ど触れられてはいなかったが、ここで初めて科学と技術の相違が、そこに構成される理論の質の違いとして出されてくる。かれは次のように言う。「社会のおよび政治的問題については、二種類の論客がいる。一部の者は自身を実際家と名付け、他の人たちを理論家と呼ぶ。後者はこの称号を決して自分たちに特有のものとは認めないが、拒否はしない。……両部門の研究者たちが共になすところは理論化に他ならず、また参考にするところの道標は経験に他ならないとしても、かれらの間には次のごとき差異があり、しかもそれはすこぶる重要な差異である。すなわち実際家と呼ばれる人たちは、特殊的経験を要求し、特殊な諸事実から一つの一般的な帰結へ向かって上向的に議論していくが、他方、理論家と呼ばれる人たちは、より広い分野を包摂しようと志し、論じられている問題のそれよりも遙かに広い範囲を含む一つの一般の原理に向かって特殊な事実から上向的に議論してきたのちに、またその一般の原理から様々な特殊的帰結へ向かって下向的に議論していく、というこれである」⁽³⁹⁾。

ここでミルが使う上向 (upwards) と下向 (downwards) という言葉は、マルクスの用語法からすれば逆ではあるが、ここで言われていることそれ事態には、両者の間にそれほど大きな違いがあるとは思えない⁽⁴⁰⁾。理論家はもちろん、実践家といわれる人も経験をもとにして理論を創る。しかし両者の違いは、その理論化のプロセスとその結果として得られた理論の質にある。実践家の場合、何か特定の経験あるいは事実を説明しようとするために、その経験あるいはそれに関連する若干の経験から出発して一つの一般的な結論に向かって議論を進めていく。しかしかれがその結論に到達した時点でかれの推論は終り、そこに得られた結論は、かれが最初にそこから出発した事実の説明としての有効性だけを獲得する。これに対して理論家の場合、単に当該の経験あるいは事実だけを説明しようとするのではなく、それに関連するより広い経験あるいは事実を前提にしてそれから抽象化の作業を進め、実践家の到達した結論よりも更に広い領域を射程に入れた一つの結論に到達する。しかし理論家の作業はここで終るのではなく、ここから種々の個別的事実や

経験を「下向的」に説明していくのである。上のように区別された実践家と理論家の方法を、ミルは、前者を単純なる帰納法あるいは後天的 (a posteriori) 方法と呼び、後者を帰納と演繹の混合された方法あるいは先天的 (a priori) 方法と呼び、経済学の方法としては後者が妥当だとするのである。

このような違いにミルが執着するのは、経験というものの捉え方の違いにある。後天的方法で最初に想定されているものは、経験そのものというより何かある個別的な経験である。だからその理論の捉えるものは個別的経験であり、それ以外の経験一般を捉えることはここでは不可能である。これに対して先天的方法というのは、概して経験などというものには全く立脚していないかのように思われがちではあるが、しかしそれらを吟味してみれば、少なくとも今ここで問題になっている政治的テーマなどを問題にする限り、その方法が経験というものに全然立脚していないなどということは決してなかった。それどころか、たとえそれが個別的・具体的な経験の説明としては不適確だとはしても、それは、それら経験の総体への正しい認識を可能にしてくれるときえ言える。そして今ここでミルにとって必要なのは、経験の総体とは言わないまでも、ある限られた領域に共通する経験そのものの質の確定ということであった。これは、social economy の一部門としての political economy における経験総体をどう捉えるかということであり、ひいてはそこでの経験の質の道徳科学全体の中での限定づけということでもあった。それゆえ、ミルは、経済学の方法としては、この先天的方法こそが唯一つ妥当な方法だと言うのである。「われわれは a priori な方法が道徳的科学における哲学的探究の正当な方法だと主張するにとどまらない。われわれはそれが唯一つの方法 (mode) であると主張する。a posteriori な方法または特殊な経験のそれは、これらの科学において貴重な真理の本体に到達するための手段としては全く有効ではないと確信している」⁽⁴¹⁾。

すでに前節でも述べてきたように、ミルの場合、かれの経済学の定義は極めて抽象的な内容を持つものであった。しかしかれがそれをこのように抽象的なものに組み立てていく過程それ自身は、決して没経験的なものではなく、逆に経験そのものが現実の世界の中で必然的にそのような抽象的なものにな

らざるをえないことを見通したところに成立したものであった。だからかれの場合、経済学の唯一つ正当な方法として提起されている先天的方法というのは、幾何学の定義のように、極めて抽象的で非現実的な仮説から出発することになる。「経済学は、知識の現状において獲得することが出来る最少量の労働と肉体的自制とをもって最大量の便宜品および奢侈品を獲得できるようにとつねに行動する存在というように、人間に関して恣意的な定義 (an arbitrary definition) を予想する」⁽⁴²⁾。恣意的な定義などという言葉は誤解を招き易い言葉だとは思いますが、言い換えれば、単なる思惟の産物でもなければといってそのままそれが現実に存在している物でもないもので、しかも今ここで問題になっている人間——前節で述べた社会状態における富の追求に一元化された人間——の経験総体の抽象によって得られたもの、ということに言うことができる。そしてこれは、ミル自身の比喩に従うなら、ユークリッド幾何学における線の規定のようなものだということになる。

さてこのようにその演繹の出発点を確定し、そこから推論が始められた場合、そこに得られる結論はどのような質を持ったものになるのか。そこに得られた理論的構成物としての経済学と現実の経験とはどのような関係になるのか。これに対するミルの答えは、今のわれわれからすれば常識的かもしれないけれども、当時の社会においては刺激的とも思われるようなものである。かれは次のように言う。「経済学はそれが当然のことと仮定された諸前提 (assumed premises) から——言い換えれば、事実の中に全く根拠を持たないかもしれないような諸前提、そしてまたどこにおいても事実と一致しているとは主張され得ない諸前提から——推論を行なう。それゆえに、経済学の諸帰結は、幾何学のそれらと同様に、普通に言われているように、抽象性においてのみ正しい、すなわち一般的原因——考察されている事例の種類全体に共通な原因——しか考慮されていない一定の仮定のもとでのみ正しいのである」⁽⁴³⁾。ミルによれば、経済学における推論の結果は、ただ抽象性においてのみ正しいのであり、現実の諸事実はそれとは区別されたものと言わなければならない。ミルが経済学の定義を社会の中の極めて抽象化された領域、すなわち富の獲得という領域に限定し、そこでの上向——一般には下向——によって一つの仮説に到達し、そこにおいて富以外のものに対しては何らの

欲求をも持たない存在としての人間を仮定し、そこから演繹して得られた結果＝経済学の諸帰結というものは、あくまでも富の追求という共通の原因に還元されうるような限られた領域においてのみ「正しい」結果にすぎない。そしてそもそもそのような領域は、複雑な原因の競合の結果として現われてくる具体的な現実と比べるなら、「抽象的」と言わざるをえないだろう。にもかかわらず、ミルは、「抽象性において正しいものは、常に、具体性においても適当な斟酌を加えて正しい」⁽⁴⁴⁾と述べるのだが、こうしたミルの主張の根底には、現実の諸帰結と経済学の諸帰結とを明確に区別しようといわれ自身強い意志が働いていると言えるだろう。かれにとっては、その両者が一致することの方が、乖離することに比べて、一層深刻な問題だったと言えるのではないだろうか。

初めにも述べたように、ミルが経済学の研究を始めた動機の中には、私有財産制を相対化するという意図が含まれていた。そしてこれは、言葉を換えて言うなら、私有財産というものの存在を絶対的な前提としてその上に成立している経済学を批判的に再構成し、これを歴史的にもあるいは同一時間内においても相対化していこうという方向を目指していたとも言える。経済学を歴史的に相対化するという作業は、ここでも定義を考えていく過程で若干示されていたが、主要には後の『経済学原理』の中で、その中でも特に第二編の「分配論」の中で、所有の歴史という形式をとって果たされていくことになる。しかし今ここでのミルの主要な関心は、いわば歴史の輪切りにされた一局面としての社会状態の中で、言葉の適切さには疑問が残るが、社会全体の中で経済学の世界を、知識の体系の中でだとはいえ、空間的に相対化していこうとする作業として進められていたとも言える。

既成の経済学に対するミルの危惧は、経済学がそれを前提にしているにもかかわらず、それについて明確な認識をもっていない抽象的な仮説が、まさにそれが経済学の中で仮説として認識されていないが故に、あたかも実在するかのごとくに振るまい、その上に構成された理論的構築物としての経済学が、現実の具体的事象全体を自己の論理のもとに包摂していくことへの危惧だったとも言える。かれが一番恐れていたのは、本来は多様な人間が経済的レベルに一元化されてしまうことだったとも言える。すなわち「文明論」

以来かれが持ち続けている主題は、歴史の中に新たに登場してきた大衆 (the masses) が如何にして自己を社会を担う主体として形成していくことが出来るかということであった⁽⁴⁶⁾。かれらは、それまでの個人に代わって歴史の表舞台に登場してきたにもかかわらず、まだ自己の歴史的・社会的役割を確立することが出来ていないように、ミルには思われていた。確かに文明の進歩は、知識と富の普及とをもたらし共同の意味を教えてくれてはいた⁽⁴⁶⁾。しかし現実には富の追求の領域が人間生活の全体を覆いつくし、教育や共同の力もいまだその力を発揮するまでには至っていなかった。こうして大衆の登場という事実は、種々の新たな社会問題を作りだしていた。にもかかわらず既成の経済学は——そしてこれはベンサム功利主義そのものも同様だったが——、こうした欲望の体系の上にあぐらをかき、あろうことかそのヨリ一層の拡大を目指すのみであった。

だからミルは、経済学の始源に、富の追求のという唯一つの欲求の次元に一元化されたような極めて抽象的な人間を置き、経済学の理論領域を抽象的世界に厳格に限定しようとしたと言える。このような理論構成を行なう限り、経済学の諸帰結と現実の事例とが異なるのは論理的にも当然であった。そしてミルの場合には、ここに生じた差異こそが問題になる。この差異が生じてくるのは、一つには経済学自身の理論構成の不十分さということも考えられるが、ヨリ重要なのは、経済学では捉えきれない他の領域に属する原因によってそれが生じる場合である。ミルは、こうした原因を攪乱的原因 (disturbing causes) と呼ぶ。ただここで注意されねばならないのは、ここでいう攪乱的原因というのが、単に経済学の理論認識を攪乱するというのではなく、経済学をもその中に含む道徳科学一般 (the moral sciences in general) にとっての攪乱的原因とされていることである。「これ (攪乱的原因) が、経済学の唯一つの不確実性を、しこうして独りそればかりでなく、道徳科学一般にとってのそれを構成する。攪乱的原因が明らかになるとき、これらのものに対してなす必要のある斟酌というものは、決して科学的精緻さを損なうものでなければ a priori の方法からの逸脱を構成するものでもない」⁽⁴⁷⁾。ここでミルが、攪乱的原因が明らかになるといふのは、力学に対する摩擦のようなもので、次第にそうした攪乱的原因は科学的認識の領域内に取り込まれ

てくと述べている。こうしたミルの主張を、ここでの主題に敷衍して考えれば、単に経済学的認識の領域が広がるということではなく——これはかれの経済学の定義からしても、理論構成上限界があるのは自明である——、道徳科学の中に含まれる経済学以外の科学的認識の深化と拡大によってそれが果たされるということになるだろう。そして、ここではそれについては触れる余裕はないが、『論理学体系』こそは、そうしたかれの意図が全面的に展開されたものだと言える。その中でかれは、心理学から性格学 (ethology) の構成を目指していたが、こうしたかれの試みこそは、上の攪乱的原因の理論化の作業だったとも言えるだろう。もっとも周知のごとく、性格学そのものは挫折するが⁴⁸⁾、そうしたかれの問題への関わりかたそのものは、『経済学原理』の中へと引き継がれていく。

この「経済学の定義と方法」においては、まだ経済学の理論の検証作業についての叙述——そこでは、一度は否定された帰納法が再評価されている——が残ってはいるが、少なくとも、この時点でのミルの経済学に対する規定とそれに固有な方法とについては、一応の概観はできたのではないかと思う。それゆえ最後に、こうしたかれの経済学の規定と方法とに対する若干のまとめを行ない、これに続くかれの方法的課題を整理しておこうと思う。

すでに繰り返して述べてきたように、ミルにとっての課題は、経済学の領域を「科学」として「限定する」ことであつた。そしてこれは、方法論のレベルで言うなら、社会科学における演繹的論理の限界を確定するという作業でもあつた。生まれる以前からイギリス古典経済学の優れた継承者であることを運命づけられていたとも言えるミルにとって、それゆえ、古典経済学を継承していくということと、しかも同時にそれを限定していくということとは、たとえそれが如何に困難だとしても、不可分な関係でなければならなかつた。社会科学における演繹的論理への疑問が生まれてきた時代的背景としては、当時のヨーロッパ諸国における経済的・政治的そして社会的状況の相違ということが第一に挙げられるだろう。そこでは、かつてスミスやそして歴史認識においては無知に等しいリカードが想定したような均質的な世界の実現——たとえそれが現実には世界のイギリス化というものであつたとしても——ということとは幻想にすぎなくなつていた。その上こうした多様に異質化された

情況は、単に諸国家間ばかりでなく一国内においても等しく見出されるところであった。すなわち労働者階級と資本家階級の対立や、これら二つの新興の階級とそれに対する地主層を中心とする古い階級との対立が、極めて深刻な社会問題を生みだしていたのは、1848年にヨーロッパ諸国を襲った諸革命を見ても、自明であろう。その上、歴史の流れは18世紀の頃とは比べものにならないくらいに早くなり、ほぼ10年周期で繰り返される経済恐慌は、均質的で恒常的な状態の想定を一層困難にしていた。こうした状況下で、伝統的な古典経済学に見られるような全人類的な帰結へと向かっていく演繹的論理では、この社会からの要請に答えられなくなっていた。少なくともミルの中では、こうした事態への明確な自覚はあったと言える。「ベンサム論」や「コールリッジ論」で導入されていた「国家」あるいは「国民性格」という言葉は、かれのこうした認識の現われと見ることができる。

しかし時代の子としてのミルのなかでは、自然科学的な「真理」に対する信頼は支配的であった。だからかれのなかでは、自然科学にたいして遅れていると思われた社会科学の科学性を、前者にならって整備することで、古典派以来の伝統を発展的に継承することができると考えられたのである。かれの意図を単純化してしまえば、複雑で多様な社会現象という前提のもとで、一定の仮説を設定しそこからその第一原理を析出し、その上で、その限りでの演繹科学としての経済学の真理性を構成しようとする、というように言えるかもしれない。かれの場合、この仮説の設定作業というのは、すでに述べたように、主要にはそれ以前の経済学自身の歴史が無意識のうちに表出してきた領域を自覚的に概念化していくという作業として提起されていた。その意味では、かれにおいて、古典経済学の方法論が完成したというように述べることは可能である。

しかしこうしたかれの営為は、同時に、古典経済学の伝統を、技術あるいは政策からは区別された「科学」という名のもとに、極めて狭い領域に限定してしまうことを意味していた。もっともかれがこのような構成を行ないえたのは、「経済学」で仮定されるようなこの狭い領域をもその中に含むより広い「社会」という概念が、かれの中で独自に構成されていたからだとも言える。この「経済学の定義と方法」の中でも、こうしたより広い「社会」概

念については触れられており、それを捉える科学としてかれ独自の「社会経済学」というような言葉も出されていた。そしてこれは、ミル自身がこれに与えている「社会の自然史」という別名からも想像されるように、歴史的に組み立てられた概念だとも言える。この歴史的に組み立てられた全体概念の中で、厳密な仮説によって限定された領域を設定し、そこに演繹科学としての経済学の定義と方法を考えているのが、この時点でのミルだといえる。しかしここではまだ、「社会の自然史」そのものの展開は不十分と言わねばならないし、そのため歴史的論理と演繹的論理との連関も不十分なまま残されていた。かれにとっては、現実の複雑な諸層を概念的に捉えるということは、まず個々の知の領域を純粋に科学的に規定し直していく作業として考えられていた。この作業は、社会科学について言うならば、心理学から始まり性格学が構想され、その上に組み立てられるはずのものであった。それゆえここでの課題の一層の展開は、「論理学体系」へと受け継がれ、更にそこでの成果をもとにした具体的な「経済学」の叙述・展開は「経済学原理」において果たされることになると言える。ミルのこうした更なる展開については、稿を改めて述べていこうと思う。

〔注〕

- (1) 出口勇蔵『経済学と歴史意識』p. 266参照。この書物は、ミルの経済学の方法を本格的に扱った書物として、わたくしが最も教えられるところの多いものであった。
- (2) 拙稿J. S. Mill's Critique of Bentham (金沢大学経済学部論集 第6巻第2号)、J. S. Mill's Acceptance of Coleridge (金沢大学経済学部論集 第6巻第2号) 参照。
- (3) *Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy* (1844) わたくしここで用いるテキストは、トロント大学から出されているJ. S. Millの著作集 *Collected Works of J. S. Mill* (以下ではCWと略記する)の第4巻に収録されているものを使用した。またわが国では、1936年に末永茂喜氏が『ミル 経済学試論集』(岩波文庫)という題で、これを訳出されている。わたくしも、引用に際してはこの訳文を利用させていただいた。ただしわたしの冒葉で訳出したところも、失礼をも顧みず、この訳文の該当ページをそれに当てている。
- (4) Samuel Hollander は最近出版された大著 *The Economics of John Stuart Mill* (Oxford, 1985) の中で、Mill は、当時の俗流経済学者が大衆に与えた経済学に対する悪印象を、かれの『経済学原理』によって払拭しようとしていたのだと述べてい

- る (cf. p. 185)。なお、このHollanderの著書は、Millの初期の経済学研究に対しても極めて詳細な叙述を行っており、ここでわたしが扱おうとしているMillの *On the Definition of Political Economy, and on the Method of Investigation Proper to It* についての数少ない研究書としても貴重なものである。
- (5) CW, I, p. 239 (朱牟田夏雄訳『ミル自伝』p. 201)
- (6) CW, I, p. 239 (朱牟田夏雄訳『ミル自伝』p. 202)
- (7) Millの社会主義論については、今ここでは触れることはできない。このテーマについては杉原四郎氏の研究『ミルとマルクス(増訂版)』及び『ミル・マルクス・河上肇』を参照されたい。
- (8) cf. CW, I, pp. 123-125 (朱牟田夏雄訳『ミル自伝』pp. 108-110参照)
- (9) CW, I, pp. 173-175 (朱牟田夏雄訳『ミル自伝』pp. 148-149)
- (10) cf. CW, I, p. 175 (朱牟田夏雄訳『ミル自伝』pp. 149-150参照)
- (11) CW, I, p. 189 (朱牟田夏雄訳『ミル自伝』p. 160)
- (12) CW, I, p. 179 (朱牟田夏雄訳『ミル自伝』p. 153)
- (13) MillとCarlyleとの交流については、時期的には少し古くなってはいるが、Emery Neffの *Carlyle and Mill* (1929) が今でも多くの示唆を与えてくれ続けている書物の一つといえる。
- (14) CW, I, p. 179 (朱牟田夏雄訳『ミル自伝』pp. 152-153)
- (15) CW, I, p. 179 (朱牟田夏雄訳『ミル自伝』p. 153)
- (16) CW, IV, p. 311 (末永茂喜訳『ミル 経済学試論集』p. 158)
- (17) CW, IV, p. 311 (末永茂喜訳『ミル 経済学試論集』pp. 158-159)
- (18) Samuel Hollanderは、前掲書において、当時のミルの立場を他の経済学者と明確に区別する方法として、これをNassau Seniorのそれと比較するという方法を採用している。Hollanderによれば、Seniorの場合リカード経済学の継承者としての評価と同時に、ここでミルが批判しているようなスミスの「理論と実践の混同」という質をも持っているため、それと対比されることによってミルの立場が一層明確になるとされている (cf. pp. 142-149)。Hollanderのこうした試みは、ミルのスミスやリカードに対する批判の当時の社会における現実性といったものを示唆してくれる。
- (19) CW, IV, p. 312 (末永茂喜訳『ミル 経済学試論集』p. 160)
- (20) cf. CW, X, pp. 84-86 (杉原・山下編『J. S. ミル初期著作集』第3巻pp. 240-244参照)
- (21) CW, IV, p. 313 (末永茂喜訳『ミル 経済学試論集』p. 161)
- (22) CW, IV, p. 314 (末永茂喜訳『ミル 経済学試論集』p. 164)
- (23) CW, IV, p. 316 (末永茂喜訳『ミル 経済学試論集』p. 167)
- (24) CW, IV, p. 317 (末永茂喜訳『ミル 経済学試論集』p. 169)
- (25) cf. CW, IV, p. 318 (末永茂喜訳『ミル 経済学試論集』p. 171)
- (26) CW, X, p. 94 (杉原・山下編『J. S. ミル初期著作集』第3巻)p. 257)
- (27) cf. CW, X, pp. 97-98 (杉原・山下編『J. S. ミル初期著作集』第3巻)p. 261参

照)

- (28) CW, X, p. 99 (杉原・山下編『J. S. ミル初期著作集』第3巻 p. 264)
- (29) ベンサム思想史上の役割は、スミスの中ではまだ残されていたこの市民社会と国家との間隙を、市民社会の側から押して行ってそこに成立する市民的な法の世界で「国家」を自己の論理の中に取り込んでしまうというものであったとも言えよう。ミルがコールリッジなどに近づくのは、こうしたベンサムの国家把握を批判するからであった。これについては先に挙げた拙稿J. S. Mill's Acceptance of Coleridgeを参照されたい。
- (30) CW, X, pp. 98-99 (杉原・山下編『J. S. ミル初期著作集』第3巻 p. 263)
- (31) CW, IV, p. 321 (末永茂喜訳『ミル 経済学試論集』p. 176)
- (32) CW, IV, p. 320 (末永茂喜訳『ミル 経済学試論集』pp. 174-175)
- (33) cf. CW, IV, p. 320 (末永茂喜訳『ミル 経済学試論集』p. 175参照)
ここでミルがPolitical Economyに代えてSocial Economyという言葉を用いていることは、かれの経済学を考える上で注意されねばならないことと思う。
- (34) CW, IV, p. 321 (末永茂喜訳『ミル 経済学試論集』pp. 176-177)
- (35) CW, IV, p. 322 (末永茂喜訳『ミル 経済学試論集』p. 177)
- (36) CW, IV, p. 322 (末永茂喜訳『ミル 経済学試論集』p. 178)
- (37) CW, IV, p. 322 (末永茂喜訳『ミル 経済学試論集』p. 178)
- (38) CW, IV, p. 323 (末永茂喜訳『ミル 経済学試論集』p. 180)
- (39) CW, IV, pp. 324-325 (末永茂喜訳『ミル 経済学試論集』pp. 181-182)
- (40) 高島光郎氏は、「ジョン・スチュアート・ミルにおける論理学と経済学」(『商学論集』第32巻 第1号)において、ミルのこうした方法を、「古典経済学の方法を経験論的に平板な形で定式化した」と述べておられるが(p. 28)、確かにミルの方法が経験論の地平にあることは疑いないが、しかしかれが先験哲学の方法を批判的に受け入れ、それを経験論的に組み代えてかれの方法を作り出したことを考慮に入れておく必要があるのではないだろうか。だからかれの場合には、ドイツ先験哲学では必ずしも明確ではなかった「特殊性」の領域に対する規定で、少なからず前進していると考えられる。
- (41) CW, IV, p. 327 (末永茂喜訳『ミル 経済学試論集』p. 187)
- (42) CW, IV, p. 326 (末永茂喜訳『ミル 経済学試論集』p. 184)
- (43) CW, IV, p. 326 (末永茂喜訳『ミル 経済学試論集』p. 185)
- (44) CW, IV, p. 326 (末永茂喜訳『ミル 経済学試論集』p. 185)
- (45) 前出の拙稿J. S. Mill's Critique of Bentham参照
- (46) ミルは、「文明論」の中で、いわばかれの現実認識とでもいうべきものを以下のよう述べている。「高度の文明状態の特徴は、財産と知性と共同の力とが普及していることである」(CW, XVIII, p. 124)。かれが現実に対して関わっていかうとする際、この三つの要素は常に重要な意味を持ち続けているとも言えよう。
- (47) CW, IV, p. 330 (末永茂喜訳『ミル 経済学試論集』p. 193)

- (48) ミルの性格学については、L. S. Feuer; John Stuart Mill as a Sociologist : The Unwritten Ethology (in *James and John Stuart Mill Papers of The Centenary Conference* pp. 86-110) を参照のこと。